

令和 6 年 5 月 10 日現在

機関番号：14201

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K20096

研究課題名（和文）アジア家族の比較分析に関する方法論の構築 家父長制尺度の妥当性と中間回答を中心に

研究課題名（英文）Methodological Development on Comparative Analysis of Asian Families: Focusing on Validity of Patriarchy Scale and Intermediate Responses

研究代表者

伊達 平和 (DATE, HEIWA)

滋賀大学・データサイエンス学系・准教授

研究者番号：70772812

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：研究成果の1点目は家父長制の重要な要素である性役割意識の多元性を明らかにしたことである。本研究では性役割意識はa)男性の家庭役割への肯定 b)分業的な性役割への否定 c) 母親の労働役割への肯定の3次元があることが明らかとなった。さらにそれらの性役割意識は夫の家事参加とも関連しており、性によって関連が異なることも明らかとなった。2点目は日本人の中間回答の背景について自由記述を元に分類した。その結果、中間回答の多くが中間的立場を示しているとは言えないこと、負担の回避は起きているが大多数を占めるとはいえないこと、社会的望ましさバイアスが強く表れているとはいえないことなどが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

性役割意識について、これまでの大規模社会調査は分業主義的な立場からの測定がほとんどであり、平等主義的な立場からの測定は限定的であった。本研究ではこの性役割意識を平等主義的な立場を含めて3次元でとらえることにより、性役割の現代的な側面について評価できるようになった。また、ジェンダー不平等の代表的な事例である夫婦内の家事分担についてはこれまで性役割意識との関連が報告されていたが、性役割意識のどの要素がジェンダー平等に資するか解釈できるようになった。また、日本人の中間回答のメカニズムを分析したことで、日本人の中間回答傾向の背景の一部が理解できるようになった。

研究成果の概要（英文）：The first of the research findings is the clarification of the pluralism of gender role consciousness, an important element of patriarchy. The study revealed that gender role consciousness has three dimensions: a) affirmation of men's domestic roles, b) rejection of division of labor gender roles, and c) affirmation of mothers' labor roles. Second, we categorized the background of the intermediate responses of Japanese respondents based on their free answers. As a result, it became clear that most of the intermediate responses did not indicate an intermediate position, that burden avoidance occurred but did not account for the majority, and that social desirability bias was not strongly expressed.

Translated with DeepL.com (free version)

研究分野：社会学

キーワード：性役割意識 家父長制 中間回答

1. 研究開始当初の背景

21世紀のアジア家族は変化している。しかしその変化の方向は一様ではなく、変化をもたらす複雑なメカニズムも十分解明されているとは言えない。一部には超低出生率、離婚率の上昇、女性の高学歴化と就業機会の拡大など、西洋社会が歩んできた第一・第二の近代（Beck 1986）の段階を一気に進めるような「圧縮された近代」がみられる一方（Chang 2010; Ochiai 2010）、これまで女性の社会進出が進んでいた社会で女性の主婦化が起きたり、比較的高い出生率を維持している社会があったりなど（Ochiai 2011）、アジア内部の差異についての研究関心が高まっている。近年では、アジア内部を詳細に比較分析出来る東アジア社会調査（East Asian Social Survey=EASS：中国・日本・韓国・台湾）やアジア家族比較調査（Comparative Asian Family Survey=CAFS：タイ・ベトナム・マレーシア・インド・カタール・トルコ）など、アジアの家族を詳細に比較できるデータの蓄積が進んでおり、アジア内部の家族の多様性と共通性を確かな量的データに基づいて明らかにすることが期待されている。

しかし、これまでの分析から、アジアの家族比較の根幹にかかわる問題も明らかとなってきた。端的にいうと、「意識と実態の乖離現象」である。例えば中国は共働きが多く、家事分担も日本より公平だが、意識は保守的である。一方、日本はアジアの中でも強い性分業があるものの、意識はリベラルである。この乖離現象を生み出す原因の1つとして考えられるのは、日本における中間回答（どちらともいえない）の多さである。例えば7点尺度の中間回答である「4 どちらともいえない」を保守的な立場ととらえた場合は家父長制意識の相対的位置は中国と同程度に保守的な位置となる。このように日本における「あいまい」な回答の多さ、そして中間回答の解釈で意識の布置関係が変わるという点は、アジアの国際比較において①家父長制を測定する尺度の妥当性や②中間回答の扱いについて問い直す必要があるということを示している。しかしこのようなアジアにおける国際比較の方法論の精緻化はデータの蓄積に比して十分とはいえない。

2. 研究の目的

本研究の目的の1点目はアジアの家父長制を測定するための尺度の開発、2点目は中間回答をめぐるアジアにおける人々の解釈を明らかにし、適切な分析方法を構築することを通じて、これまで西洋を中心として発達してきた国際比較研究の方法論を再構成することを目的としている。

3. 研究の方法

本研究を遂行するためインターネットによる量的調査について、国内調査と国外調査（タイ・ベトナム・マレーシア）の2つの調査を実施した。

国内調査については、調査対象は調査時点で日本に住む20歳～69歳の男女であり、調査期間は2023年2月21日～3月1日である。標本抽出は割当法を用いた。具体的には、性別（男性・女性）・年齢段階（5歳刻み）・地域（北海道・東北・近畿・中部・近畿・中国・四国・九州）で層化し、2020年の国勢調査によって各セルのサンプルサイズの割合が2020年の国勢調査の割合と一致するように割り当てた。本調査の調査項目は、性役割に関する意識16項目、本人と配偶者の家事頻度7項目、本人と配偶者の年齢・学歴・就業状況などの属

性や主観的健康観，同居家族などを含めている。

国外調査については、基本的には国内調査に準じた。調査地は韓国・タイ・ベトナムであり、調査対象は調査時点でそれぞれの国に住む 20 歳～69 歳の男女であり，調査期間は 2024 年 2 月 19 日～3 月 1 日である。標本抽出は割当法を用いた。具体的には，性別（男性・女性）・年齢段階（5 歳刻み）のカテゴリについてそれぞれ 50 名ずつ均等に割り当てた。最終的に 600 名×3 か国で合計 1800 回答を集めた。調査内容は基本的に日本国内調査に準じた。

4. 研究成果

研究成果の 1 点目は家父長制の重要な要素である性役割意識の多元性を明らかにしたことである。本研究では性役割意識は a) 男性の家庭役割への肯定 b) 分業的な性役割への否定 c) 母親の労働役割への肯定の 3 つの次元があることが明らかとなった。さらにそれらの性役割意識は夫の家事参加とも関連しているが、その関連の仕方は性によって異なることも明らかとなった。

2 点目は日本人の中間回答の背景について自由記述を元に分類した。その結果、中間回答の多くが中間的立場を示しているとは言えないこと、負担の回避は起きているが大多数を占めるとはいえないこと、社会的望ましきバイアスが強く表れているとはいえないことなどが明らかになった。このことで、日本人の中間回答行動の背景についてさらに深く解釈できるようになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 伊達平和	4. 巻 3509
2. 論文標題 専業主婦を「選択」する韓国高学歴女性の論理	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Heiwa DATE
2. 発表標題 How Can We "Neither Agree Nor Disagree?": A Content Analysis of Reasons for Intermediate Responses to Questions with Respect to Gender Role Attitudes in Japan
3. 学会等名 XX ISA World Congress of Sociology（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Heiwa DATE
2. 発表標題 Similarities and Differences in Patriarchal Value and Filial Piety in Asian Societies: Results from the Cafs Project
3. 学会等名 XX ISA World Congress of Sociology（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 伊達平和
2. 発表標題 性役割意識項目における回答選択理由の内容分析 中間回答を選択する人々の論理に着目して
3. 学会等名 第96回日本社会学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 伊達平和
2. 発表標題 家事分担の規定要因としての性役割意識項目の再検討
3. 学会等名 日本家族社会学会第33回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 伊達平和
2. 発表標題 「どちらともいえない」はどのように説明されるのか 性役割意識における中間回答理由の内容分析
3. 学会等名 関西社会学会第73回大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 伊達平和	4. 発行年 2023年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 330
3. 書名 「アジア家族比較調査の挑戦」平井 晶子、中島 満大、中里 英樹、森本 一彦、落合 恵美子編 『わたしから始まる社会学』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

CAFS Hope page https://sites.google.com/view/cafshomepage/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------